

## 令和5年秋の叙勲 アルベス氏への伝達式：大使挨拶

2024年7月26日

さて、本日は、日伯農業協力に大きく貢献されたエリゼウ・ロベルト・デ・アンドラーデ・アルベス氏に叙勲を伝達できることを大変光栄に思います。

アルベス氏は、ミナスジェライス州でお生まれになり、ヴィソザ連邦大学農業工学部、パデュー大学を卒業され、ジェットウリオ・バルガス財団コンサルタント等での勤務を経て、ブラジル農牧研究公社（以後、EMBRAPA）の創設時に局長として入社し、EMBRAPAでの勤務を始められました。

アルベス氏がEMBRAPAに入社した昭和48年（1973年）は、EMBRAPAが創設された年であり、当時、世界規模での食料危機・日本の安定的な食料調達に係る危機に対応するべく構想され、今や農学史上20世紀最大の偉業の1つとされる日伯協力事業である「セラード農業開発研究協力事業（以下、セラード事業）」の取り組みが始まろうとしていた年でもあります。アルベス氏は、EMBRAPAの局長として勤められた昭和48年（1973年）から昭和53年（1978年）にかけて、EMBRAPA創設期の組織づくりとともに、セラード事業の実現に向けてご尽力され、昭和52年（1977年）、セラード事業の開始を実現させました。

また、昭和54年（1979年）から昭和59年（1984年）にかけては、EMBRAPA総裁として陣頭指揮を執り、セラード事業第2期の本格事業の開始に繋げ、ブラジルが世界最大の大豆・トウモロコシ輸出国となる礎を築きました。

更に、平成2年（1990年）から令和5年（2023年）にかけては、約30年の長期に渡りEMBRAPA総裁顧問として各総裁を補佐し、EMBRAPAの全体戦略の支援にあたられました。その結果、EMBRAPAを南半球最大の農業研究機関に育て上げ、食料輸入国であったブラジルを世界有数の食料輸出国にしました。これにより、アルベス氏は、世界の食料の安定供給、引いては日本の食料安全保障に大変大きな貢献をされました。

また、アルベス氏は、平成3年（1991年）に来日され、EMBRAPA設立及びセラード事業について講演を行うとともに、国際協力機構（JICA）緒方貞子平和開発研究所との共著論文を通じて、日本によるセラード開発に対する貢献を世界に広く認知させました。

これらの貢献を称え、本日、アルベス氏に対して「旭日中綬章」を伝達させていただきます。

現在、世界では、露のウクライナ侵略や、悪化する中東情勢により食料安全保障が懸念される中、日伯セラード事業をきっかけに世界最大の大豆・トウモロコシの輸出国となったブラジルが、まさに世界の食糧危機を救おうとしており、大変誇らしく思います。

また、今月初旬の岸田総理の訪伯の際において、EMBRAPA、農業・畜産省、農業開発・家族農業省、そしてJICAの間で「セラード事業」の後継とも言える劣化牧野に関するプロジェクトのMOUが締結され、これから協力が始まろうとしています。アルベス氏の御功績に倣い、このプロジェクトが新たな日伯農業協力の象徴的な成功案件となることを期待します。

改めて、アルベス氏の御功績に敬意を表すると共に、御家族、友人をはじめ、協力してこられた関係者の皆様に感謝するとともに、お祝い申し上げます。